

第 67 回加藤周一文庫公開講読会「『続 羊の歌』を読む」

——第十七章「格物致知・後半」——

立命館大学 博士後期課程

堀内 智吉

【前半のおさらい】

この当時(1955～)の加藤は三井鉱山株式会社に医者として勤務しつつも、雑種文化論や『日本文学史序説』へと繋がる論考といった、後に彼の代名詞となる2つの論考の原型を書き上げていた。その一方で、加藤は医業の多忙さ故に、知識を蓄えるための十分な時間が確保できておらず、「格物致知」とはかけ離れた生活を送るしかない現状にもどかしさを感じていた。

【後半の概略】

本章後半では、加藤の「知ること」についてのスタンスが過去の経験を踏まえつつ様々に描かれており、「格物致知」を目指す加藤は最終的に医業から身を引くことを決心する。単純に捉えるならば、本章で描かれているのは「科学的な加藤」から「文学的な加藤」へと変わる瞬間ということもできるかもしれないが、加藤自身が述べているように実際に起こったのは「専門化の専門家」から「非専門化の専門家」への転換である。本当の意味で多くのことを「知る」ためには、専門化を廃さねばならない、というのが加藤の到った結論なのだろう。

※「知る」ためには実物に触れるしかないのか？

真の意味で「知る」ためには実物を直に体験するよりほかはない。とはいえ、すべての事物に対してそれが叶うわけではない。現代における高度な複製の技術を用いれば、限りなく実物に近いものを体験することもできるだろう。その場合、「複製を知ること」と「実物を知ること」にはどれほどの差があると言えるのだろうか。

色の写真と印刷技術は進歩した。大量生産の複製は、さすがに粗末すぎて実物と似ることが少いが、仕事の念入りな複製は実物を想起させるのに充分である。それは第一に、われわれがみたことのある実物の印象をもう一度思い出すために好都合であり、第二にその作品の実物を沢山みたことのあるアーティストのまだみたことのない作品を想像するのに役立つ、第三に作品の全体ではなく特殊な一面を判断するためにも、また必要に応じて二つの作品を比較するためにも便利である。

「…」 「これで原作がわかるのでしょうか」とだれかがいった。「もちろんよくわかるでしょう」と私は答えた。しかし私にとって、絵はわかるためにあるのではなく、感動するためにある何ものかだ。西洋名画五〇選の見世物で、少くとも私は蕪村の実物五枚を見物したときの一〇〇〇分の一も感動しなかった。

「複製と実物」『著作集 11 巻』133-136

第六段落

しかし私が医を廃するに到ったのは、多忙に堪えなかったからだけではない。医学の研究は、また専門化の極端に進んだものである。仕事に没頭して一年を過した後、私はしばしば、あたかもその一年がなかったかのように感じた。一年の間に、来り去った季節と、周囲の世界におこった出来事のすべてを、もはや覚えていなかったからである。その間研究室の外では、私は生きていなかった。そこには生涯の記憶の空白があり、その代りに一篇の論文が残っている。その交換は、等価交換であろうか。しかし一年の時間は、私の人生に属し、一篇の論文は、普遍的な知識の体系の全体に属する。全く別の秩序に属する二つの価値を比較することはできないだろう。私はそういう交換に満足することができなかった。必ずしも私の仕事が自然科学の研究だったからではないかもしれない。しかし極端に専門化した領域では、私ひとりの人生と研究の内容との間に、どういう橋渡しをすることもできない。おそらく詩作に没頭するのは、学問の研究に没頭するのとはちがうだろうし、李杜の詩の内容は、李杜の人生の他にはなかったはずであろう。私は詩を必要としていたといえるのかもしれない。

○「その代りに一篇の論文が残っている」

1957年に加藤は共著で「後天性溶血性貧血と赤血球寿命」という論文を執筆している。（『日本血液学会雑誌』20巻3号補冊、1957年）

○「専門化」について

本段落では「極端に専門化した領域では、私ひとりの人生と研究の内容との間に、どういう橋渡しをすることもできない」と加藤が述べていることからわかるように、学問の専門化に対する疑念や批判が示唆されている。加藤に似た見解をマックス・ウェーバーも以下のように述べている。

学問上の「達成」はつねに新しい「問題提出」を意味する。それは他の仕事によって「打ち破られ」、時代遅れとなることをみずから欲すのである。〔…〕原則上、この進歩は無限に続くものである。かくて、われわれはここで学問の意義はどこにあるかという問題に当面する。〔…〕これについては、さしあたりこう答えることができよう、それは〔…〕学問上の経験が教えるところによって実際生活におけるわれわれの行為を期待された方向に導くためである、と。よろしい。だが、それは要するに実際家にたいする意義にすぎない。問題はむしろ、学問にたずさわる人が自己の職業にたいして有する心構えのいかにある。〔…〕ところで、このような人はいうであろう、学問は「それ自身のために」なされるのである。たんに人々に営業上のまた技術上の便宜を与えるためでもなく、またたんに人々の衣食住を改善するためになされるのでもない、と。それならば、かれは〔…〕この専門分化しかつ永遠に終ることのない営みに結びつけられていることによって、いったいどのような意義ある仕事をなしつつあると考えているのであろうか。

マックス・ウェーバー『職業としての学問』（岩波文庫）29-31

学問の専門化は研究者を日常から切り離していくことがここでは述べられている。だが専門化の弊害は日常からの乖離だけではない。極端な専門化は同じ学問の中にも亀裂を生む。しかも、学問の中でもとりわけ科学はその傾向が強いようである。例えば、オルテガは以下のように述べている。

科学を進歩させるために、科学者の専門化が必要とされたのである。**ただしそれは、科学者の専門化であって科学そのものの専門化ではない。**科学は専門分科的なものではないのだ。もし専門分科的なものであれば、真の科学ではなくなってしまうだろう。実験科学でさえ、それを全体的に考えた場合、そこから数学、論理学、哲学を切り離してしまえばもはや真のものではない。しかし科学にかかわる労働は——不可避免的に——専門化しなければならないのである。〔…〕〔研究者の仕事が漸進的に専門化して行く〕歴史は、科学者が世代を重ねるにつれて、ますます狭くなる知的活動分野のなかにしだいに身を閉じこめていく姿を見せてくれるだろう。〔…〕つまり科学者が、世代ごとに自分の活動範囲を縮小していかねばならないために、**科学の他の分野や宇宙の総合的解釈との接触をしだいに失っていく姿**である。ところが、宇宙の総合的解釈こそ、ヨーロッパ的科學、文化、文明の名に値する唯一のものなのである。〔…〕専門家は知者ではない。というのは、自分の専門以外のことをまったく何も知らないからである。と言って、無知な人間でもない。なぜなら、彼は「科学者」であり、彼が専門にしている宇宙の小部分についてはたいへんよく知っているからだ。われわれは彼を知者・無知者とでも呼ばねばならないだろう。これはきわめて重要なことである。というのは、**そうした人間は自分が知らないあらゆる問題についても、無知者として振舞わずに、自分の専門分野で知者である人がもつ、あの微慢さで臨むことを意味しているから**である。オルテガ『大衆の反逆』（白水社）158-161

科学が発展していく中で専門化という手段をとること自体は自然なものではあるものの、それは最終的に科学という大きな枠組みへと統合されることを終着点とした細分化でなければならない。しかしながら、実際に生じているのはそれぞれの専門分野が強烈に孤立した「科学者の専門化」である。この科学者は、確かに自らが修める分野については如何なることでも知り尽くしているが、ひとたびそこから離れれば、たちまち無知者となる。ここで自らの無知に謙虚に向き合うことができれば問題はないかもしれないが、行き過ぎた専門化はその謙虚さを忘れさせ、無知を弁えるどころかその態度は傲慢なものとなり、結果として不要な対立を生むきっかけを作ってしまうのである。

ところで、上述の話は「科学」においてのものであったが、このような学問における不毛な対立の筆頭はまさしく科学と文学、日本においては理系と文系の間に見られる溝としてよく知られているだろう。この対立について、チャールズ・スノーは次のように述べる。

私の信ずるところでは、**全西欧社会の人びとの知的生活はますます二つの極端なグループに分れつつある。**〔…〕この二つの極端なグループの一方には文学的知識人がいる。〔…〕文学的知識人を一方の極として、他方の極には科学者、しかもその代表的な人物として物理学者がいる。そしてこの二つの間をお互いの無理解、ときには（若い人たちの間では）敵意と嫌悪の溝が隔ててい

る。だが、もっとも大きいことは、お互いに理解しようとしめないことだ。彼らはお互いに、相手にたいして奇妙な、ゆがんだイメージをもっている。〔…〕非科学者たちは、科学者は人間の条件に気がつかず、浅薄な楽天主義者であるという根強い印象をもっている。一方、科学者の言ずるところでは、文学的知識人はまったく先見の明を欠き、自分たちの同胞に無関心であり、深い意味では反知性的で、芸術や思想を実存哲学の契機にだけかぎろうとしている。〔…〕 **この分極は、個人としてのわれわれ、人民としてのわれわれ、またわれわれの社会にとって、ひどい損失である。**

C. P. スノー『二つの文化と科学革命』（みすず書房）5-13

ここでは、科学と文学の対立が学問の受益者である社会にとっても損害となることが述べられている。またこの対立は多くの場合「お互いの無理解」に基づいており、その不毛さが強調されている。ところで、専門化の弊害や科学と文学の対立といった話題は日本においても観測されるものであり、とくに文科省は2002年に以下のような報告を挙げている。

我が国の人文・社会科学は、明治以降、主として大学における研究・教育組織の創設と、その社会的要請に応じた整備・拡充とともに発展してきた。しかし、**学問が進化するにつれ、人文・社会科学を構成する各分野・領域の専門化・細分化が進み、多くの場合、研究・教育活動が閉じたそれぞれの体系の中で行われているのが現状である。**このため、**自然科学との間はもとより、人文・社会科学相互あるいは分野の間、さらには同じ分野の異なる専門の間でさえ十分な交流や協働が行われてきたとは言いがたい。**また、研究者の課題意識やテーマ設定も細分化された狭い関心のみに向く傾向が強く、個々の研究課題が社会とどのような関わりを持ち、またどのような意味があるのかについて、研究者自身、問いかけや自己省察に消極的であったという面は否めない。

文科省「人文・社会科学の振興について

－21世紀に期待される役割に応えるための当面の振興方策－（報告）」[2002年]

学問の専門化をめぐる問題系は20世紀以降現代に至るまで続いているものであり、加藤もまたその流れの中で自らの立ち位置を探っていたのだと言えるだろう。そのひとつの答えが「詩を必要とすること」だったのである。

※科学と文学の関係についての詳細は「格物致知・前半」のレジюме p.8-10、あるいは『著作集16巻』所収の「科学と文学」を参照。

★ホーリズム

- 1 〔哲学〕全体論，ホーリズム：実在の基本的構成要素である全体が，部分の総和以外の存在を持つという理論
- 2 〔医学〕全体観的治療：患者のすべての状態を把握して治療すること。
- 3 〔心理〕全体論，ホーリズム：人の心は各部分の集合体ではなく，1つのまとまった単位として研究されるべきだと主張する心理学的体系。参照：『ランダムハウス英和大辞典』

第七段落

そればかりではない。私はまた周囲の社会に何がおこりつつあるかを知りたいと思っていた。太平洋戦争の間日本国に暮しながら、私が政府の宣伝に迷わされることがなかったのは、実際におこりつつあることを知っていたからではなく、知らなくても容易に見破れるほど、宣伝が自己矛盾にみちていたからである。いくさの成行きについて、私の判断の大すじがまちがっていなかったのは、私が実際の情勢に通じていたからではなく、近代の歴史の流れからみて、その流れの方向に逆おうとする者はほろびるだろうと信じていたからである。天網恢々疎にして漏らさず。つきつめたところ、それは価値判断で、事実判断ではなかった。その価値判断にもとづく仮定は、たしかに私の知っていたかぎりでの事実と矛盾しなかったが、私の知っていた事実は全くかぎられたものにすぎなかった。顧みて、いくらか、当るも八卦当らぬも八卦の印象を、みずから禁じることができない。私は同じ事を二度くり返したくなかった。天下国家の大事については、一市民の手に入れることのできる情報は常にかぎられたものでしかないだろう。それにも拘らず、目前の情勢の変化と将来の成行きを、一個の全体として、考えるためには、多かれ少かれ価値判断と係りのある仮説を樹てる他はあるまい。しかし私は、そういう仮説を、いくさの頃よりは綿密に工夫し、いくさの頃よりは多くの事実によって検証したいと考えていた。文藝風流のことを離れても、私はそのための時間を絶望的に必要としていたのである。

○「いくさの成行きについて、私の判断の大すじがまちがっていなかった」

第二次世界大戦中の日本の動向に関して加藤が「推測」をする場面は『羊の歌』の「内科教室」でも語られている。そこで描かれているのは、戦争に対するというよりは、「事実に基づく推測」という科学的な立場に対する加藤の見解である。

ある晩、私たちは、米軍がまた日本軍のまもる一つの島に上陸したという報道を聞いた。「断乎敵を粉碎する」と、その報道はつけ加えていた。「そうはゆかないだろう、どうせまた米軍が占領するのだろう」と私は呟いた。そう呟いても誰もとり合わずに、話はそのまま身の廻りのことに移ってゆくのがいつもの慣わしでもあった。しかしその晩当直して犬鍋の宴会に加っていた若い医者は、私の言葉にこだわった。「どうせまた、とは何ですか」と思いがけなく激しい声で彼はいった。「情報局が、断乎敵を粉碎するといったのは、今日がはじめてではないからさ」と私は話を打ち切るつもりで応じた。しかし相手はひき下らなかった。「けしからぬではないですか、どうせ敵が勝つだろうというのは」「そうだろうか」と私はいった。「そうだろうかじゃない、今、米軍がまた占領するだろう、といったばかりでしょう」「もちろん、そういったさ。それで君が怒ることはないだろう。今まで米軍が太平洋の島に何度も上陸して占領に成功しなかったことは一度もない。とすれば、今度の上陸も、失敗の見透しよりは、成功の見透しが大きだろう」「そうとは限らない……」と相手はいった。「たしかに成功するとは限らない、明日のことはたしかにはわからない、しかし米軍が占領に失敗するだろうと想像するための材料はない。成功するだろうと考

える材料だけが多いということだ」「あなたという人は、必勝の信念が……」「……あってもなくても、これは信念の問題ではない。客観的な状況判断の問題にすぎない」「敗北主義だ」と彼は叫んだ。「ちょっと待ち給え」と私はできるだけ興奮を抑えていった、「ぼくは島の日本軍がおそらく敗北するだろう、といったので、敗北することが望ましい、といったのではない。その二つは、全く別のことだ。敗北することが望ましい、といったとすれば、精神的な裏切で、敗北主義かもしれない。しかし敗北しないことがどれほど望ましくても、その望みと、おそらく敗北するだろうという判断とは、全く関係がない。病人に癒ってもらいたいという願いと、その病気がおそらく癒るだろうか癒らぬだろうかという判断とを、はっきり区別できなければ、そもそも医学は成り立たない……」「病気と戦争はちがいますよ」と相手はいった。「いや、ぼくの比較の限りでは、少しもちがわないね」と私はつづけた、「病気と戦争がちがう位のことは、わかり切っている、しかしそのちがいのために、事実判断と価値判断との区別が、一方で必要で、他方で不必要になるということは決してない。その程度のことさえははっきり考えられないで、学問はできないよ。信念だの敗北主義だのと、そんなことは軍人がうんざりするほどいっている。大学は学問をすることだ、学問にとって信念などはびた一文の値うちもない。われわれは、どういう事実を知っているか。上陸した米軍の兵力も、島の日本側の兵力も、われわれにはわからない。われわれの知っている事実は、太平洋の小さな島に米軍がすでに何度も上陸し、上陸して占領しなかったことは今までに一度もなかったということだけだ。それだけの事実から、今度の上陸の成功と失敗のいずれが、より確からしいと判断できるか。ぼくは米軍がたしかに成功する、とは決していわなかった。おそらく成功するだろう、といったのだ。そのどこにまちがいがあるのか。それが情報局の気に入らぬだろうというのなら、話は別だ。はっきりそういったらいいじゃないか。ただ情報局をかさに着て、いいがかりをつけるのはよせ。敗北主義だの何だのと、馬鹿馬鹿しくて聞いてちゃいられない。よくもその程度の頭で……」。 「内科教室」『著作集 14 巻』203-205

ここで加藤は事実に基づく限りにおける推論をした自身に対して、「必勝の信念」をもって食って掛かってくる同僚を強く非難している。この両者の対比は事実判断と価値判断の対立として理解することができるだろう。加藤があくまで事実判断(「アメリカの軍事力と過去の戦績を見るに日本は敗北する(だろう)」)に留まっているのに対し、同僚は価値判断(「日本が勝つと信じ、そう主張すべきである」)に従って主張をしている。そのため、両者の主張は平行線をたどることとなった。

以上のように、「内科教室」では事実判断と価値判断の明確な区別を指摘していた。とはいえ、加藤は価値判断が事実判断を支え得ること自体は否定していない。観察できる事実が限られている場合に限るといった留保付きではあるものの、事実の収集に先立って仮説を立てるためには価値判断に頼るしかない時もあるのである。とはいえ、加藤自身は「そういう仮説を、いくさの頃よりは綿密に工夫し、いくさの頃よりは多くの事実によって検証したいと考えていた」とのべているように、あくまで妥当な事実判断が下せることを欲しているのである。

○事実と価値

ところで、事実と価値という対比軸は、加藤の書きたいいくつかの論考の中で手を変え品を変え様々に表現されている。例えば「単純な経験と複雑な経験」における記述は、この二項対立がかなり包括的なものであることを示している。

世界についての知識を獲得するために、人は複雑な経験を単純な感覚的経験に還元する。ここで単純な経験というのは、原則として、いつでも誰にでも、繰り返され得るような経験である。**そういう経験の系列が、科学者のいわゆる「観察資料」の基礎であり、そこから出発し、長い推論の過程をとって到達する結論が、知識である。知識の領域では、あたえられた命題の真偽を語ることができる。**〔…〕しかし特定対象についての知識は、その対象のわれわれにとっての意味を決定するのに充分ではない。個別的な対象とわれわれとの関係は、その対象のおかれた体系の全体とわれわれとの関係から独立しては決らぬことが多いからである。また対象の評価は、対象に関する知識ばかりでなく、多かれ少かれ知識から独立した価値（評価の基準）を前提とするからである。しかるに科学的な知識は、現実の体系の全体ではなく、その部分に係り、個別的・特殊ではなく、普遍的な面に係る。しかも知識は究極的な価値を決定しない。したがって世界が何を意味するかは、知識の領域のなかでは決らない。

信条の領域は、それ故に、個人の生活にとっても、社会の文化にとっても、欠くべからざるものとなる。**信条の体系は、何よりも単純な経験からではなく複雑な経験から出発するという点で知識の体系とちがう。**〔恋とか戦争とかバッハの音楽といった〕複雑な経験は、経験者によって異なるばかりでなく、当人にとっても、原則として、繰り返されない。単純な経験は、特定の時と場所で、特定の対象と特定の人物との間でおこるが、その時と場所、その対象と人物が変わっても、大きくは変わらないと考えることができる。〔…〕〔複雑な経験は〕その出発点がすでに万人に共通のものではないから、その到達点もまた万人には通用しない。**すなわち信条の領域での命題については、意見のちがいがあって、究極的には真偽の区別がないということになる。**

「単純な経験と複雑な経験」『著作集 7 巻』245-247

ここでは「単純な経験と複雑な経験」、「知識と信条」、「科学と文学」が同種の対立項であることが示唆されている。とはいえ、加藤はこの対立が優劣を競う類のものとして捉えていないことには留意しておく必要がある。たしかに「内科教室」では「**学問にとって信念などはびた一文の値うちもない**」などと過激な発言こそしていたが、それはただ「事実としてそうである」と述べているだけであり、信念そのものを全面的に否定しているわけではない。実際、加藤が目指した「非専門化の専門家」という在り方は、この種の対立を乗り越えた先にある境地なのだと思う。

※「信念の排除」という主張と「信念の意義」についての主張が共存しうることは、この後の段落及び引用資料で再度触れる。

第八段落

幸いにして私は太平洋戦争に生きのびた。しかし生れて育った街が一晩のうちに灰燼に帰し、人心が荒廃して、昨日の同僚とも今日は話が通ぜず、餓えた人々の怨嗟の聲の巷にみちるのを見聞した。多くの青年が毎日死に、そのなかには、私の二人の親友も含まれていた。そういうことのすべては、私の生を左右した。しかもそういうことのすべてが、天災でも、運命でもなく、一連の政治的決定の結果に他ならなかった。いくさの間語り合うことの多かった旧友のひとり、中国の戦線へ行き、病を得て還った。戦後の東京で出会ったときに、「政治の話はもうやめよう」と彼はいった。「ぼくはひっそりと片すみで暮りたいよ」「しかし君を片すみからひき出したのは戦争だね、戦争は政治現象だ」と私はいった。「戦争はもう終わったではないか」「政治現象は、決して終らない」「しかしどうにもならぬことではないか」「たとえどうにもならないことであるとしても」とそのときに私はいった、「ぼくはぼくの生涯に決定的な影響をあたえたいし、またあたえることのできるだろう現象を、知りたいし、見きわめたいと思う。たとえどうにもならないとしても、女房の姦通の相手を知りたいと思うのと同じことだ」「ぼくは知りたくないね」と彼はいった。「それは、どうにもならないから、ではないだろう。知りたくないということがまずあって、どうにもならない、という理窟があとから来るのだ」「そうかもしれない、そうしておいてもいいよ」「しかしその理窟はおかしいのだ。君は静かに暮りたいという。静かに暮すための条件は、君の女房の行動よりも、もっと決定的に、われわれの国の政府がどういう政策をとるかということだ。それは知りたくない……」「何も知らずに暮しているのが、いちばん幸福だね」と彼は呟き、私は彼を理解していた。いくさの傷手は、私の想像も及ばぬほど深かったにちがいない。それは私の想像も及ばぬ経験があったからだろう。もはやそれ以上にいうことは何もなかった。しかし私は物理的にそれが不可能でないかぎり、私自身を決定する条件を知らなければならない。歴史、文化、政治……それらの言葉に、私にとっての意味をあたえるためには、私自身がそれらの言葉とその背景とにつき合ってみる他はない。

○「多くの青年が毎日死に、そのなかには、私の二人の親友も含まれていた」

大戦中に戦死した加藤の友人は何人かいるが、『羊の歌』では中西哲吉の名前が挙げられていた。それ以外にも、加藤周一文庫が保管している書簡群の中には友人や級友の戦死報告について書かれたものが複数ある。

○「いくさの間語り合うことの多かった旧友のひとり、中国の戦線へ行き、病を得て還った」

加藤の友人で、戦時中に中国へ渡った人物には立石龍彦がいる。加藤文庫所蔵の書簡には中国遠征中の立石から届いた16通の書簡が保管されている。

※「病を得て還った」のが立石であるのかまでは不明。

参考：「加藤周一文庫所蔵書簡資料の紹介」『加藤周一現代思想研究センター報告 2』（2025）228

○「いくさの傷手は、私の想像も及ばぬほど深かったにちがいない。それは私の想像も及ばぬ経験があったからだろう。もはやそれ以上にいうことは何もなかった。」

旧友は戦場での経験を思い出したくないからか、加藤と戦争の話題について語ることを避けている。このような戦地からの帰還者の振る舞いについて、加藤は以下のように述べている。

二〇〇七年の八月一五日に「朝日新聞」(東京本社版)の「声」欄は、一九四五年の八月に房総半島の海軍基地で水上特攻艇の整備をしていた武藤勝美氏の回顧談を掲載した。武藤氏はそこで日本国の降伏を知り、特攻艇数十隻を沖に運んで沈めた後、復員の準備をして数日後には鉄道で東京に向かった。彼はその列車の窓から「広々とした蒼い海で数人の子が泳いでいる穏やかな風景」を見る。そして「戦争は本当にあったのだろうか」と思う。「八月一五日が来ると不思議にあの光景が鮮明に蘇ってくる」というのである。これは戦争と平和の対照ではない。戦争はもちろん現実にあった。海に沈められた特攻艇は悲劇的な戦争の象徴である。海に遊ぶ子供たちの光景は、平和な日常性の表現、戦争さえもが遂に破壊し去ることのできなかった日常生活の秩序の表現である。[…]これを裏返してみれば、戦場からの多くの帰還者が家族や友人に対して沈黙を守った理由だろう。二つの世界の断絶感は、しばしば「話しても理解されないだろう」という絶望感に近い。その意味で武藤氏の「あの光景」の経験は孤立していなかった。

「戦争は本当にあったのだろうか」『自選集 10』435-436

戦地での凄惨な体験は、日常からあまりにもかけ離れているために共有されえない。それゆえ、帰還者たちが口をつぐむのは、平和な日常の空気を崩してしまうことへの気遣いというよりも、むしろ「理解されえない」と感じるからこそなのだろうと加藤は推測している。

○「知ること」について

本段落では、旧友との会話を通じて加藤の「知ること」に関する考えが窺える。旧友が「何も知らない方が幸福」であると述べるのに対して、加藤は「自分自身を決定する条件を知るため」に必要なことは全部知りたいと考えている。しかも、知ることが物理的に不可能でない限りは知る努力をしていきたいという意気込みまで見て取れる。この「知ること」に対する熱意は、事実には依拠することを重視するという加藤の一貫した姿勢を支えるものであるが、それゆえに加藤は「知ること」を怠った戦時中の知識人を強く批判している。

「国民はだまされていた」とか「国民は何も知らされていなかった」という説明は、国民の大多数に通用するかもしれないが、知識人には通用しないだろう。大衆は事実「知る」ことができなかったかもしれないが、知識人は「知る」ことができた。後者の場合には、もし何も知らなかったとすれば、知ろうとしなかったのだと考えるほかはない。何をか。もちろん特別の情報や「大きな声ではいえぬ真相」や「ここだけの話」を、ではない。戦争宣伝にみたされた新聞の紙背に、多少の注意力と若干の常識をもってすれば当然よみとることのできるものを、である。殊に太平

洋戦争が、満州事変以来とめどのない冒険に向ってすべりだした軍国主義の結論にほかならないという事実、天皇神格化の時代錯誤とそれに伴うすべての理性的思考の破産という事実は、もしその気さえあれば、知識人の誰にとっても、それを知るための材料は、見事に、完全に、日常茶飯、眼のまえに、遺憾なく出そろっていた。だから「知らされていなかった」といって、あたかも態度決定のための資料・情報がなかったかのように主張するのは、ごまかしである。

「戦争と知識人」『著作集 7 巻』 290-291

加藤によれば、戦時中の知識人(ここで想定されている武者小路実篤)は「知ることができた」にもかかわらず「知ることを怠った」者として批判されている。当時の政府が公表した情報を注意深く観察していれば、そこに隠されている嘘や欺瞞を見抜くことは知識人にとってそれほど難しいものではなかっただろうと加藤は考えている。それゆえ、戦後に「私はだまされていた」と述べた武者小路を加藤は強く批判するのである。

そんな「知ること」に並々ならぬ熱意を持った加藤は、その重要性を後世に伝えることも怠らなかった。例えば、以下は小学校の教科書に掲載された加藤の「知ること」論である。

何かを知っているとは、どういうことか。〔…〕要するに、意味のはっきりした文があって、その文のほんとうであることが、私にとって確かなときに、またそのときにのみ、私はその文の内容を知っている、ということが出来る。したがって、**「知る」ということは、「感じる」とも、「望む」とも、「信じる」とも、ちがう。**「今日は嫌な天気だ」と私は「感じる」ので、「知る」のではない。天気の話として、その文ははっきりしていないからである。「明日は雨がやむでしょう」は、確かでないから、私が「知っている」ことではなくて、明日遠足に出かけたいと思っている私が「望む」ことである。「遠足は健康のためによろしい」は、よほど長い時間をかけなければ、ほんとうかうそか確かめようがない。それは、私が「知る」ことではなくて、「信じる」ことである。〔…〕**私は、私が知りたいことのなかで、知り得ることと知り得ないこととを区別し、知り得ることについては、それを知るためにやらなければならないことをやる。知り得ないことについては、あきらめる。**私は今出かける前に、雨が降っているかどうかを知りたい。それを知るために私のやることは、窓を開けて、外をみることである。私はまた、これから会いにゆく人といっしょに暮して、長く幸福であるだろうか、ということも知りたい、と思う。しかしそれは、くじの当り番号のようなものである。遠い先の知り得ないことを知ろうとしてむだな努力をするよりも、私は、現在と近い未来のことを考えるだろう。知りたくて知り得ないことはたくさんある。それでも、私が「望む」ことは、私が「知る」ことの代りにはならない。それは二つの別のことである。またほかの人のいうことは、そのまま私が知っていることではない。人は誰でもうそをつくことがある。**だまされたくなければ、私は、みずから知っていることと知らないこと、知り得ることと知り得ないことを、はっきり区別するほかはないのである。**

「知る」ということ」『著作集 16 巻』 353-358

ここには、これまでに確認してきた「知ること」に関する加藤の見解が全て集約されているだろう。「知る」は「感じる」や「信じる」と区別されねばならないこと、「知り得る」なら徹底的に知ろうとするし、「知り得ない」ならあきらめること、そして自分の人生に関わる（もちろんそれはだまされないようにするということも含む）ものであるならば徹底的に「知ろうとする」こと。加藤は自らの力で「生きていくこと」は「知ること」の積み重ねであると考えていたのであろう。

第九・十段落

私は血液学の専門家から文学の専門家になったのではない。専門の領域を変えたのではなく、専門化を廃したのである。そしてひそかに非専門化の専門家になろうと志していた。その後、今日まで、私は、竹内好や安保条約や『源氏物語絵巻』について書き、日本の近代思想史やヨーロッパの現代思潮ということについても書き、また大学の教室で、『正法眼蔵』や『狂雲集』のことを喋った。そういう話題は、外からもとめられたのではなく、それぞれの機会にみずから扱ったのであり、私にとっては互いに関連のないものではなかった。はじめからはっきりしていたのではなく、次第に私自身にみえて来るようになった一種の関連……しかしそれはもっと後になってからの話である。

私は容易に医業を捨てなかった。しかし、機会は、中央アジアの作家会議へ出かける決心をしたときに、訪れた。勤先の鉱山会社は、医務室を別の医者に委ねて一ヵ月以内の休みならば認める、といった。私は三ヵ月を必要とした。職を辞して私は出発し、その後再び医者の仕事に戻ることはなかった。

○安保条約

1960年に書かれた論考において、加藤は安保条約を以下のように批評している。

岸内閣と安保条約の不評判は、今ようやくヨーロッパの新聞にも伝えられたようだが、日本の国内では一年もまえから、この条約をめぐる争いがつづいてきた。その争いの基本的な理由は、一方にアメリカとの経済的な結びつきの必要があり、他方にアメリカとの軍事的な結びつきの危険があって、それをどう評価し、どう調整するか、意見のちがいがあからだといってよいだろう。政府は、アメリカに軍事基地を提供することで、日本が極東の軍事的紛争にまきこまれる心配はないと説明している。しかし、「事前協議」によって駐留アメリカ軍の行動を束縛できるから心配ないという説明には、多くの国民が釈然としていない〔…〕。そこで政府は「アメリカの善意に信頼する」という。友好国アメリカが日本に不都合なことをするはずがない——とア・プリーオーリに確信して、ゲタを他人にあずければ、安心立命の境地がえられるにはちがいないが、これはいわば宗教的信念のようなもので、現実的な政策の裏づけとしては無理だろうと思う。

「安保条約と知識人」『著作権 15 巻』23-24

アメリカに対して根拠のない信頼を寄せるばかりか、それを条約締結の妥当な根拠とする政府見解に加藤は疑念を向けている。「宗教的信念のようなもの」という評価からもわかるように、少なくとも当時の政府の見解は事実に基づいた——すなわち知識に支えられた——ものではなく、むしろ無根拠な信条によって支えられた脆いものに過ぎないというのが加藤の認識だったのであろう。

○竹内好

昭和時代の中国文学者、評論家。明治43年10月2日生まれ。昭和9年武田泰淳らと中国文学研究会を結成して「中国文学月報」を発刊。戦後都立大教授をつとめたが、35年日米安保条約改定の強行採決に抗議して辞職。魯迅の研究と翻訳で知られ、日本文化の近代主義を批判する評論でも活躍した。昭和52年3月3日死去。66歳。長野県出身。東京帝大卒。著作に「魯迅」「中国を知るために」など。 参照：『日本人名大辞典』

また、上述の安保条約に関する論考の中でも加藤は竹内に言及している。

竹内好教授は、この〔岸信介〕内閣のもとで教職をつづけることはできないとあって、その奉職していた大学に辞表をだした。それは、立場の左翼的であるとか、自由主義的であるとかいうこととは関係がない。ファシズムをやってきた人間が、ファシズムをふたたび日本の国土に迎えないということ、またどういう種類のいくさであっても、いくさには一切まきこまれたくないということ、従ってすべての武装を放棄した平和憲法制定の精神をまもろうということであるにすぎない。**国難をきり抜けるには、理想主義が必要である。**〔…〕政府・与党は、条約承認の手續は、警官導入も含めて合法的であったといい、反省の余地は全くないと称している。しかし「ロマ書」第三章第二八節にもいう、「人の義とせらるるは、律法の行為によらず、信仰に由るなり」と。**民主主義的な理想への信仰がなければ、合法的にも民主主義のほろびた例は少ないのだ。必要なのは理想主義である。**

「安保条約と知識人」『著作権 15 巻』27-28

ここでは、安保条約の締結をめぐる抗議の意を示した竹内の真意を加藤が推測している。戦争それ自体はもちろん、戦争を招くかもしれない政治体制への断固とした反発は、「負の時代」を生きたものとして同じ過ちを犯すまいという当然の意志表示であった。だが、この論考の中で興味深いのは加藤がある種の理想主義の必要性を説いていることではないだろうか。これまで確認してきたいくつかの資料の中で、加藤は知識と信念(あるいは信条や望み)を明確に区別しつつ、前者に依拠することを強く主張していた。もちろんそれは後者の無価値さを意味するものではなかったが、加藤自身が持っていた、あるいは認めていた信念の具体的な姿は描かれていなかった。だが、ここで示された「民主主義的な理想への信仰」というのは少なくともその具体的なものの一つであるということができよう。

○『正法眼蔵』

鎌倉時代の仏書。道元撰。道元の代表的著書の一つ。参禅修行のうえに必要と考えられる古則（真理実践の規範となる禅者のことば）を漢文体で集録した真字本（3巻）と、和文体の仮字本（96巻）の2種がある。〔…〕本書は、全仏法の根源である釈尊の自内証（悟りの原体験）に直結する道元の深い禅定体験を通して、坐を全一なる「正伝の仏法」ととらえ、この坐禅の唯一絶対行こそが万人の抛るべき安楽の道であることを説く。この禅定に明証された「一切衆生悉有仏性」（すべての存在が仏のいのちであるということ）が万人に共通普遍の現事実であるとし、この普遍的生命（本証）の事実にたつて、広く一切の平等性と成とを強調して尊厳なるいのちへの自覚を説く。それとともに、存在論にかかわる問題として、生死一如、有時相即（存在の生命活動そのものが時の様相）、行持道環（仏性の事実を不断に相続する実践）などの論、その他、現実生活面での種々の具体的真実のあり方が説かれており、深い境涯より出づる本書の思想は、日本思想の最高峰に位するものといえよう。

参照：『日本大百科全書』

しかしわが国にも男女平等論者はあった。そのなかでおそらくもっとも早く、またおそらくもっとも徹底していたのは、一三世紀の初めに曹洞禅を説いた釈道元である。主著『正法眼蔵』は、宗教的、哲学的、文学的（日本語散文として）に見て、劃期的な傑作であるが、そこには「礼拝得髓」の一篇があって、直接に男女差別問題に触れる。「礼拝得髓」の「髓」は、仏法の真髓という意味で、「得髓」は「得法（の人）」である。仏教徒の唯一で究極の目標は得法（悟り）であるから、得法の人に会えば、これを礼拝して師とすべきだというのである。そのことにおいて、年齢・経験・社会的地位・僧位・性別などは、関係がない。「比丘の高年宿老なりとも、得法せざらん」は、「比丘尼の得法せざらん」に若かない。これが「礼拝得髓」の第一段に説くところである。その第二段では、女を見て姦淫の心を生じるから、これを避けるという議論を、「至愚」の言い分とし、「酔狂の言語」とする。もし女を見て迷う人ならば、男を見ても迷うだろう、迷う境縁は男女にかぎらず、世界中にかぎりがない。「女人なにのものがあある。男子なにの徳かある。悪人は男子も悪人なるあり。善人は女人も善人なるあり」。男女差別を強調する男は、男である以外に何の取柄もない奴にすぎない。〔…〕このように論じ来たつて、「礼拝得髓」は、最後に、日本国の「ひとつのわらひごと」、女人禁制の道場を批判していた。

「女の解放運動または『正法眼蔵』」『著作集 15巻』149-150

○『狂雲集』

一休宗純の作品集の一つ。一休にはほかに『狂雲詩集』『自戒集』などがある。『狂雲詩集』が漢詩の集であるのに対し、『狂雲集』は頌、偈、賛などの集である。頌や偈は仏教の教えや自己の宗教的境涯を詠むもので、外形はまったく詩と変わらない。詩が情緒や感覚によって詠まれるのに対して、頌、偈は思想や精神の境涯が表出される。『狂雲集』には収録作品数の異なる11の諸本があるが、

作品はすべて七言絶句である。内容は狂雲の名にふさわしく、自信と悔恨の間に揺れ動く激情と、飲酒・肉食・女色の破戒と、偽善と腐敗を暴く非常識と、求道の真摯さとの、熱烈な精神に満ちている。

参照：『日本大百科全書』

『狂雲集』の七言絶句一千余首は、大別して三種類とすることができる。第一種は、禅の思想を述べる「偈」であり、伝説的な禅僧の生き方を語る「賛」である。その詩にあらわれた迫力と自信と洞察の鋭さは、並の禅僧のそれではなく、あきらかに一休の悟得の一流の質を思わせる。第二種は、淫坊の性的快楽からはじめて、盲女森との交渉の肉感的で同時に超越的な経験に及ぶ抒情詩である。そこでは「抱持嚏吻」はもとより、「吸美人姪水」の語までを用い、遂に「三生」を誓った盲女森との一夜に、永遠をみるに到る。「秋風一夜百千年」——これをラテン語に訳せば<sub specie aeternitatis>（「永遠の相の下に」）であり、近代のドイツ語に訳せば<Liebestod>（「愛の死」）であり、徳川時代町人社会の言葉に訳せば、「此の世の住、秋の日よ……」。しかし「未来は」「一つ蓮」ということになろう。第三種は、当時の禅寺および禅僧の墮落を批判して、激しく痛烈な調刺である。 「秋風一夜百千年または『狂雲集』の事」『著作集 15 巻』

『狂雲集』の「秋風一夜百千年」という感覚は、哲学の言葉で言えば「永遠の相の下に」であり、近代芸術の語彙で言えば「愛の死」であり、江戸町人文化の言葉に置き換えれば「あの世まで届く恋」の調子になる。表現は文化ごとに異なっても、愛の極致が時間を突き抜けて永遠を感じさせるといふ到達点は同一である。

関連参考文献：「一休という現象」『著作集 3』（1978）

○源氏物語絵巻

かねがね私は、世間に有名な品物には、上等なものが多い、という意見でもある。『源氏物語絵巻』が有名ならば、それにはそれなりの理由がありそうだ、と考えていた。ただその理由が、必ずしも私に納得されていたとはかぎらない。ことに実物を見物したことがない場合においてそうである。あらためて実物を見て、傑作の傑作たるゆえんに納得がゆけば、それは「私にとっての」発見だということにはなるかもしれない。〔…〕一方には『源氏物語』の「時間」があり、他方には『源氏物語絵巻』の「空間」があった、ということができる。その一方の時間は、終末論を含まない具体的で現実的なこの世の時間である。物語は永遠を考えなかったから、時の流れに敏感であることができた。他方の空間は、合理主義的な均斉を含まない感覚的で微妙な日常的世界の空間である。『絵巻』は左右相称や黄金分割を無視したから、空間の構造に無限に敏感になることができた。このような時間と空間の性質は、おそらく藤原時代の宮廷文化の徹底した此岸性と日

常性において、またそれゆえにこそかぎりなく洗練された感覚的世界において、共通の背景を見出すのである。おそらくそこで、またそこでだけ、『源氏物語』と『源氏物語絵巻』とは、その文学としてまた藝術としてのそれぞれの中核において、相応じるといえるのではなからうか。私はそこに日本の文化の故郷を感じる。その世界の構造は、基本的には変らぬままで今日にもつづいている。今でも日本の藝術が微妙なものにちかづくときには、このような時間の質、または空間の質があらわれるように思われる。

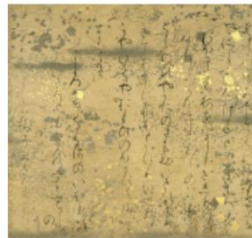
『源氏物語絵巻』について』『著作集 12 巻』 179-185

関連参考文献：「日本文化における時間と空間について」『自選集 10』（1966）

鈴木一



絵



詞書第二面（第三紙）



詞書第一面（第一・二紙）

画像：五島美術館ホームページ

○中央アジアの作家会議

インド人作家たちの呼びかけで 1956 年 12 月インドのニュー・デリーで開かれたアジア作家会議（参加 17 か国。日本代表団長堀田善衛）がその始まりで、アジア、アフリカ両大陸連帯の必要性を背景に、1958 年 10 月第 1 回会議（37 か国。団長伊藤整）がウズベキスタン共和国のタシケントで開かれ、「タシケント精神」（反帝国主義、反植民地主義）を確認した。

参照：『日本大百科全書』

加藤周一からの引用：初出一覧

- ・ 1959 年：「戦争と知識人」『著作集 7』
- ・ 1960 年：「単純な経験と複雑な経験」『著作集 7』
- ・ 1960 年：「複製と実物」『著作集 11』
- ・ 1960 年：「安保条約と知識人」『著作集 15』
- ・ 1965 年：「『源氏物語絵巻』について」『著作集 12』
- ・ 1966-1967 年：「内科教室」『著作集 14』
- ・ 1975 年：「女の解放運動または『正法眼蔵』」『著作集 15』
- ・ 1975 年：「「秋風一夜百千年または『狂雲集』の事」」『著作集 15』
- ・ 1986 年：「「知る」ということ」『著作集 16』
- ・ 2007 年：「戦争は本当にあったのだろうか」『自選集 10』